

ストックホルム市庁舎におけるスウェーデン建築の「ナショナル・ロマンティシズム」

小林朋世 (大阪大学)

スウェーデンの20世紀初頭の代表的な建築の動向の一つに「ナショナル・ロマンティシズム(Nationalromantiken)」がある。建築におけるナショナル・ロマンティシズムとは、ルースヴァル(Roosval, Johnny August Emanuel, 1879-1965)が1929年のプリンストン大学での特別講義で、スウェーデンの1900~1930年の建築の動向を指す言葉として名付けたものである。ルースヴァルによると、その動向の特徴は、スウェーデンの歴史的な建築(主に、カルマル城、ヴァステーナ城、グリップスホルム城といったヴァーサ時代に建てられた城館)と、イタリアのフィレンツェやヴェネチアの宮殿やフランスのゴシック建築などを折衷したものである。また、ルースヴァルは、この折衷主義は、クラソン(Clason, Isak Gustaf, 1856-1930)の北方民族博物館(1907)に始まり、エストベリ(Östberg, Ragnar, 1866-1945)のストックホルム市庁舎(1923)でその成熟期を迎えたとした。しかし、ルースヴァルは、建築におけるナショナル・ロマンティシズムについて、その詳細な定義を行っておらず、今日でもなお、その定義や有効性を多くの学者たちが議論している。

エストベリは、ストックホルム市庁舎を、同市を象徴するために、ストックホルムに古くから伝わる民話を象徴する彫像を建物の装飾として飾り、その平面をスウェーデンの古城を参考にしながら設計した。エストベリは、当時活躍した建築家、デザイナー、画家、彫刻家らを市庁舎の室内装飾や庭園の装飾のデザインのために採用した。ストックホルム市庁舎は、当時のスウェーデンを代表する諸芸術の集合とも言える。ストックホルム市庁舎の「青の間」は北歐的新古典主義、「黄金の間」はビザンチン風とされ、また、その外観はヴェネチア的であり、ファサードはスウェーデンの中世建築に用いられたような煉瓦で作られている。そのような、ストックホルム市庁舎を、ペヴスナー(Pevsner, Nikolaus, 1902-1983)は、巧みな折衷主義として、ヨーロッパの建築史の中に位置づけた。

本発表では、エストベリのストックホルム市庁舎の意匠を、エストベリが残した図面やスケッチ類、日記、エストベリが執筆や編集を担当したスウェーデンの建築誌『アルキテクトゥール (Arkitektur)』の記事等を参考に分析し、同市庁舎の建築における「ナショナル・ロマンティシズム」とは何かを明らかにする。